

命の重さと軽さ

稲宮 健一

今月十四日の日経新聞に原子核の粒子線を使ったがん治療の記事が載っていた。治療法の名称はホウ素中性子補足治療法と云う。治療は最初に注射で腫瘍細胞の部位にホウ素薬剤を集積させ、そこに加速器で加速した中性子を照射し、癌の部位に局所的な核反応を起させ、従来の放射線治療に比べて遥かに大きな線量を癌細胞に当て癌細胞を消滅させる治療法である。この核反応で生ずるエネルギーは細胞一個分の範囲しか届かない。治療法は一九六〇年代に米国で開発されたが、中性子やホウ素化合物の質が悪く、成果が上げられなかった。発想が優れていたので、中性子を取り出す加速器、正確な照射位置を制御する照射メカニズム、ホウ素薬剤など実用化研究が行われた。二〇一〇年代に住友重機と京都大学が研究を開始し、十二年から臨床試験を開始、二〇一六年に治療が始められた。従来は手術、放射線照射、抗がん剤治療で二か月程の入院が必要だったのが、この治療法では照射は一日で終わる。日本発の治療法と記述されている。

同じ紙面の下の方にロシアが大規模攻撃開始との記事が載っている。また、記録映画で独ソ戦の映像が再現されていた。スターリンが登場し、ロシアの戦死者が一千万人を超えたとのこと、かつての鉄のカーテンの東側のソ連の統治に一種のノスタルジヤを持つプーチンは自国民の犠牲など彼の関心事ではないようだ。独ソ戦の時は攻められ戦争であり、膨大な戦死者も祖国防衛のためという名目が成り立つが、自分の野望のため起こした戦争に対して、戦死者にどのような哀悼の意を伝えられるのか。

がん治療は実際に治療に使って目の目を見るまで日陰の状態で実用化に向けて、地味な努力が続けられた。一人の患者から見ると、多数の開発者のたゆまぬ努力が結集し命が助かる。これに対比して、プーチン一人の悪夢から始まった今度のウクライナ戦争は既に数えきれない犠牲者と破壊の終わりの見えない泥沼に苦悩している。